

数理統計 補助資料

～多変量解析のための固有値分解の復習～

2023年度2学期： 月曜1限, 水曜3限
 担当教員： 石垣 司

複数の変数から発生したデータを利用して、変数間の関係性を分析する手法の総称

- 可視化: データが含む情報を効率的に提示する手段
- 予測・判別: 未知データの予測や判別
- 仮説検証: データと計量モデルを用いて仮説の正しさを検証
- 発見: データ中に存在する(かもしれない)パターンを発見



本授業で扱う手法

- 重回帰分析, 主成分分析, 判別分析, 因子分析など

固有値と固有ベクトル

固有値問題

- $N \times N$ の正方行列 A に対して, 方向を変化させないベクトルの組 $\{p_1, \dots, p_N\}$ とスカラーの組 $\{\lambda_1, \dots, \lambda_N\}$

$$Ap_i = \lambda_i p_i$$

を求める問題

- λ_i を A の固有値, p_i を λ_i に対する固有ベクトルと呼ぶ

固有方程式

$$|A - \lambda I| = 0$$

の解 $\lambda (\lambda = \lambda_1, \dots, \lambda_N)$ は固有値となる

- 固有値が求まれば、それに対応する固有ベクトルも求まる
- 問題: 次の行列の固有値と固有ベクトルを求めなさい

$$A = \begin{bmatrix} 3 & 1 \\ 2 & 2 \end{bmatrix}$$

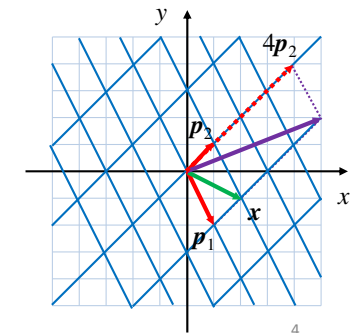
固有値分解による対角化の解釈

例: 標準基底での線形変換 $A = \begin{bmatrix} 3 & 1 \\ 2 & 2 \end{bmatrix}$ は, ベクトル $x = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix}$ をどのような変換するか?

- 標準基底での表現 $Ax = \begin{bmatrix} 3 & 1 \\ 2 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 5 \\ 2 \end{bmatrix}$
- 固有ベクトルの組の行列 P を基底とした表現

$$P^{-1}AP \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}_{p_1 p_2} = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 4 \end{bmatrix}$$

標準基底での線形変換 A はベクトル x を固有ベクトル $p_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix}_{p_1 p_2}$ の方向へ1倍
 固有ベクトル $p_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix}_{p_1 p_2}$ の方向へ4倍
 する変換を施す



2次形式の行列による表現

2次形式(変数の2次の項“のみ”からなる多項式)

– x_1, \dots, x_M : M 個の変数

– a_{11}, \dots, a_{MM} : $M \times M$ 個の係数

$$f_2(x_1, \dots, x_M) = \sum_{i=1}^M \sum_{j=1}^M a_{ij} x_i x_j$$
$$= a_{11}x_1^2 + \dots + a_{MM}x_M^2 + \dots + 2a_{12}x_1x_2 + \dots + 2a_{(M-1)M}x_{M-1}x_M$$

例: $f_2(x, y) = ax^2 + bxy + cy^2$

2次形式の行列による表現

– $x = [x_1 \dots x_M]^T, A = \begin{bmatrix} a_{11} & \dots & a_{1M} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{M1} & \dots & a_{MM} \end{bmatrix}$

$$f_2(x) = x^T A x$$

5

対称行列と2次形式

対称行列

– $A = A^T$ を満たす正方行列

例: $A = \begin{bmatrix} x & a & b \\ a & y & c \\ b & c & z \end{bmatrix}$

特に, $A \in \mathbb{R}^{M \times M}$ のとき実対象行列とよぶ

2次形式($x^T A x$)中の行列 A と対称行列

– 行列 A を実対称行列とすると任意の2次形式 f は $f = x^T A x$ と表現できる。

– また, その実対称行列 A はただ1つに定まる

6

対称行列と直交行列

対称行列 $A = A^T$

– 例: $A = \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 4 \end{bmatrix}, B = \begin{bmatrix} 2 & 4 & 6 \\ 4 & 3 & 1 \\ 6 & 1 & 5 \end{bmatrix}$

– 性質: 対称行列の異なる固有値に対する固有ベクトルは直交する

直交行列 $UU^T = U^T U = I$ または $U^{-1} = U^T$

– 例: $A = \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 1 & -2 \end{bmatrix}, B = \begin{bmatrix} \cos\theta & -\sin\theta \\ \sin\theta & \cos\theta \end{bmatrix}$

– 性質: 正方行列 U の各列のベクトルが直交していて, かつ, ノルムが1に正規化されている

7

2次形式と行列の定値性

2次形式 $x^T A x$ (復習)

– A は対称行列。 x は任意のベクトル

– 例: $x^2 + 4xy + 5y^2 = [x \ y] \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 5 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = x^T A x$

行列の定値性

零ベクトル以外の任意の x について次の条件を満たすとき, 対称行列 A を次のように呼ぶ

– $x^T A x > 0$ のとき, 正定値行列 (\Leftrightarrow すべての固有値が正)

– $x^T A x \geq 0$ のとき, 半正定値行列 (\Leftrightarrow すべての固有値が非負)

– $x^T A x \leq 0$ のとき, 半負定値行列 (\Leftrightarrow すべての固有値が非正)

– $x^T A x < 0$ のとき, 負定値行列 (\Leftrightarrow すべての固有値が負)

– 対称行列の定値性の(固有値を用いない)判別法(シルベスタの定理)

正定値行列 \Leftrightarrow 首座小行列式がすべて正

負定値行列 \Leftrightarrow 首座小行列式が交互に負, 正と繰り返す

8

制約付き最適化問題の性質

制約無し最適化問題の解との関係

制約付き最大化問題の解 $f(a_1, \dots, a_N)$

制約無し最大化問題の解 $f(b_1, \dots, b_N)$

- $f(a_1, \dots, a_N) \leq f(b_1, \dots, b_N)$

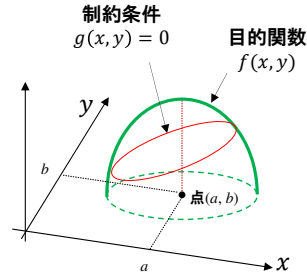
具体例

- $\max_{x,y} x^2 + y^2$

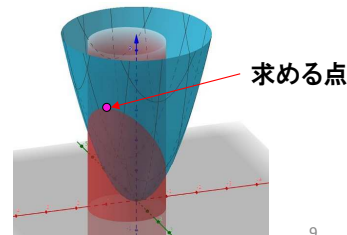
- s. t. $x^2 + y^2 - x - y - 1 = 0$

制約無しの場合 $x^2 + y^2$ の最大化は ∞

制約付きの場合は解あり



制約付き最適化問題では点(a,b)が最適点ではない



ラグランジュ未定乗数法

目的関数 $f(x_1, \dots, x_N)$

制約条件 $g(x_1, \dots, x_N) = 0$

ラグランジュ関数 $L = f(x_1, \dots, x_N) - \lambda g(x_1, \dots, x_N)$

- ラグランジュ乗数: $\lambda \in \mathbb{R}$

- f, g は一階微分可能

- $\frac{\partial L(a_1, \dots, a_N)}{\partial x_i}$ は L を x_i で偏微分し、その後 (a_1, \dots, a_N) を代入を表記

制約条件を満たす $f(x_1, \dots, x_N)$ が点 (a_1, \dots, a_N) で極値をとり、

かつ、 $\left[\frac{\partial g(a_1, \dots, a_N)}{\partial x_1}, \dots, \frac{\partial g(a_1, \dots, a_N)}{\partial x_N} \right]^T \neq 0$ ならば

$$\Rightarrow \frac{\partial L(a_1, \dots, a_N)}{\partial x_1} = \dots = \frac{\partial L(a_1, \dots, a_N)}{\partial x_N} = \frac{\partial L(a_1, \dots, a_N)}{\partial \lambda} = 0$$

$f(x_1, \dots, x_N)$ が制約条件の下で極値となるための必要条件

2次形式の最適化問題と固有値問題

目的関数が2次形式の制約付き最適化問題

- 目的関数 $x^T Ax$

- 制約条件 $x^T x = 1$

- 固有値問題に帰着する check!

- A が半正定値対称行列のとき、最も大きな(小さな)値をもつ固有値に対する固有ベクトルが $x^T Ax$ を最大(最小)とし、その固有値の値は $x^T Ax$ に一致する

半正定値対称行列: $x^T Ax \geq 0$ を満たす対称行列 A

- $f(x) = x^T Ax$ とすると関数 $f(x)$ は凸関数

∴ 定理: $f(x)$ は凸関数 $\Leftrightarrow f(x)$ のヘッセ行列は半正定値

$f(x)$ のヘッセ行列: $H = 2A$

分散共分散行列

分散共分散行列 V

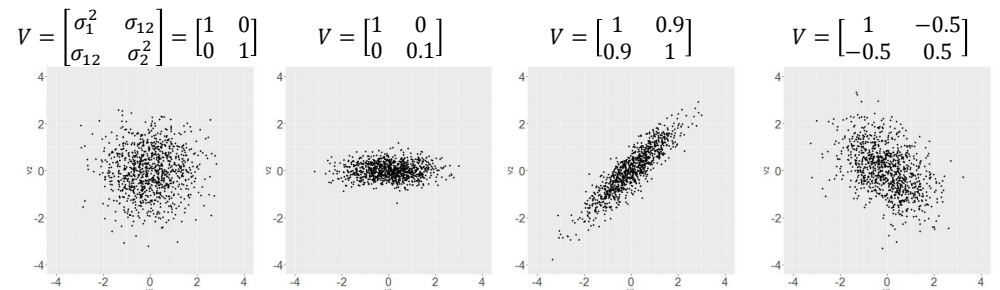
#メモ 図のデータは分散共分散行列 V の多変量正規分布から1000個の乱数を発生

- x_1, \dots, x_M を確率変数、期待値を E で表すとき、

$$V = \begin{bmatrix} E[(x_1 - E[x_1])(x_1 - E[x_1])] & \dots & E[(x_M - E[x_M])(x_1 - E[x_1])] \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ E[(x_M - E[x_M])(x_1 - E[x_1])] & \dots & E[(x_M - E[x_M])(x_M - E[x_M])] \end{bmatrix}$$

対角成分は各 x_i の分散(σ_i^2)

対角成分以外の要素は各 x_i と x_j の共分散(σ_{ij}) (変数間の線形関係の強さを表す)

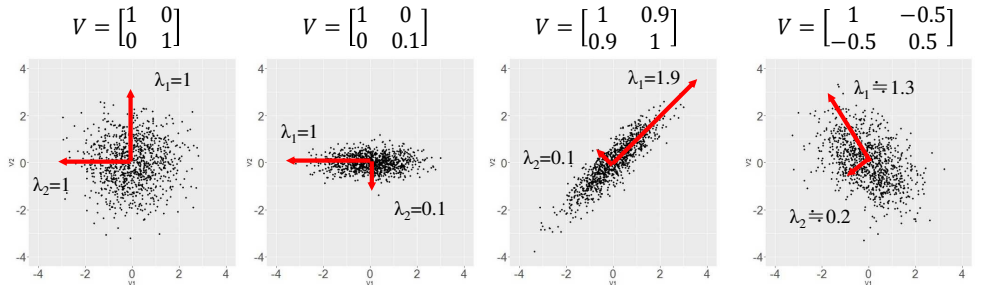


分散共分散行列と固有値問題

分散共分散行列 V は半正定値対称行列

– 各固有ベクトルは直交する

#メモ 多変量解析の手法である
主成分分析や判別分析の数学的本質



$$p_1 = k \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix}, p_2 = k \begin{bmatrix} -1 \\ 0 \end{bmatrix} \quad p_1 = k \begin{bmatrix} -1 \\ 0 \end{bmatrix}, p_2 = k \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix} \quad p_1 = k \begin{bmatrix} 0.7 \\ 0.7 \end{bmatrix}, p_2 = k \begin{bmatrix} -0.7 \\ 0.7 \end{bmatrix} \quad p_1 = k \begin{bmatrix} -0.85 \\ 0.53 \end{bmatrix}, p_2 = k \begin{bmatrix} -0.53 \\ -0.85 \end{bmatrix}$$

– V の最大固有値に対応する固有ベクトルは、データと直線のズレの2乗の期待値を最小にする直線と同じ方向を向く

13

演習問題

1. 対称行列 $A = \begin{bmatrix} 3 & 1 \\ 1 & 3 \end{bmatrix}$ に関する次の2次形式の制約付き最適化問題を解き、 $x^T A x$ を最大とするベクトル x_1 と最小とするベクトル x_2 をそれぞれ求めなさい。

– 目的関数 $x^T A x$

– 制約条件 $x^T x = 1$

14